

Title	マキヤベリの唯物史観とその誤謬
Sub Title	
Author	朝日, 融溪(Asahi, Yukei)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.4 (1930. 12) ,p.113(645)- 125(657)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19301200-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マキヤベリの唯物史觀とその誤謬

一

文藝復興運動の特性的影響が政治思想の上に最もよく表はれたのはイタリア人ニココロ・マキヤベリ Niccolò Machiavelli とイギリス人トーマス・モーア Thomas More との思想によつて知ることが出来ると思ふ。この時代に於ける政治家とこの二人との政治に關する思念の差異を認めると同時に、この二人によつて想定せられた政治的制度的上に閃く批判的精神の強制的表白を見逃してはならないのである。

先づマキヤベリの思想を検討してみやう。幻想家的豫言者であつたサボナローラ Savonarola の死刑執行後數週間に於てマキヤベリはフロレンスの國際問題を取り扱ふべき重要な職に就いた。こ

マキヤベリの唯物史觀とその誤謬 (朝日)

の位置を彼は一五一二年の共和政府の没落まで十三ケ年間保つてゐた。その間に彼はしばしばフランスとドイツとへ外交問題のために派遣せられ、また、イタリアの諸國へも使した。かくして、彼は人と言ふものと事件と言ふものとに就いての智識を得たのであつて、その智識にもとづいて、彼はサン・カッシアノ San Cassiano に於ける止むなき隠退中に彼の卓見と思想とを書き下したのであつた。その結果はメディチ Medici 家の支配の下に共和政府の再發となつたのであつたが、彼の生涯の餘生は痛ましくつかれ切つて、而して、失戀に悩んだ人の運命の悲惨なものと同じやうなものであつた。

要職を贏ち得んとする彼の希望と彼の失敗とは一五一二年に於ける彼の失職と一五二七年に於け

(六五)

一一三

る彼の死との間に挟まつた十五年間に彼が書いた著書にその責任があつたのであらう。“Principe”と“Discorsi”との二大著書は一五一三年に書き下したものであつたが、この二大著書が、彼の名を不朽にしたのであつた。マキヤベリは眞に政治的思想家中の巨星であつて、アリストートルの時代以來現はれた一大翹星であつた。

吾人に對するマキヤベリの出現の重要意義は彼の本質にあるよりは寧ろ彼の方法論に存するのであると思ふ。政治上の問題を取り扱ふ方法に於いて彼は正に政治哲學に於ける新人であつたことを示してゐる。彼は夫等の問題に對する解答のため天啓によらずして、過去の歴史に訴へてゐる。

彼は政治を神學から分離せしめ、而して、彼の指導者の如く尊べる歴史によつて導かるる理智に従つてゐる。中世紀の學者達は政治學説を色々念入りに仕組んでをるけれども、それは多くの神學的立場から組織されたものであつたと思ふ。時として歴史に土臺を置いたことがないでもなかつたが、夫は單に法王の神政的最上權を實行するた

めか、或は皇帝の神授權を辯護せんためであつた。彼等が法王若しくは皇帝の擁護者となつて立論する時は何時でも、その權力の根柢が直接若しくは間接に、人間的ではなくて神授的であると言ふ假設から道理づけたのであつた。この神學的認識論が、彼等の學説を支配してゐたのであつて、彼等の秩序的論法は、その主要點が、それに極限されてゐなかつたとしても、大部分は聖書と長老達の言葉とによつてゐたのである。

第十四世紀に於けるパドワ Padua のマルシリオ Marsilio の如きは、この型を破つた人であつてその啓蒙的聲が政治學に就いて從來よりも合理的觀念を説破したやうであつたけれども、教會と帝國と言ふ永遠の問題によつては尙ほ神學的色調を脱することを得なかつたやうに思はれる。彼は實に彼の意見の或るものに於いて大膽なる近代的思想を有してゐたのであつた。即ち彼の宇内統一帝國としての國家を考へてゐたのであつたが、かくなる時は教會はその主たるべきであると思つてゐた。尙ほ或る理想が彼の心の中に或る暗示を與

へてゐたやうに思はれるけれども、彼は教會と帝國とから國家を捌き分けやうとはしなかつた。

二

マキヤベリの“Discorsi”の“Principe”とを繙くと吾人はマルシリオの思想よりも深刻に、太陽と月とに就いて、即ち出世間的教會と法王とに對する俗世間的帝國と皇帝とに就いての彼等の果しない議論をつゞけてゆく中世紀に於ける諸學者の論法を忘れしめられるのである。

吾人はマキヤベリの思想を検討して、初めて彼が政治學に於ける教育還俗論者であり、宗教に於ける異端者であり、方法論に於ける科學者であることを知るのである。彼は單なる形式論者としての煩瑣哲學者を排斥し、而して歴史に於いて説明された事實を以て事を處理せんと欲したのである。

マキヤベリに對して歴史は、恰かも、自然現象が科學者に對して重大意義を有するが如く重要であつて、すべての事實を或る豫想された神學的學

說から切り離して研究し、考量したのである。それは傳統的信念に拘束されない理性が、歴史を根據として展開したる独自の意見であつて、それが彼をして、政治思想に於ける革命家となし、新人となしたのである。この意味に於いて彼のこの二著書はその革命を記したものであるとも言へるであらう。

この二書に於いて吾人は政治界の原野に或る力を與へたる文藝復興期の批判的にして合理的な精神の發露を見ることが出来る。然し、彼が彼の觀察の視野をローマの歴史に限らしめたことは不當であると思ふ。彼は歴史的に偽りのないものとしてリビー Livy の物語をそのままにうけいれた。彼は何事かの事實を論證せんとする時は政治界の根源をそれによつて想定して満足してゐた。

彼は發展によつての進化の觀念を有してゐなかつたやうであつて、古代歴史特にローマ史と言ふものがすべての歴史の尺度であると考へてゐた様に思はれる。かくして、彼の結論は輕卒であつて偏頗であつたと言はれやう。然し、彼は正しき道

の上に立つてゐたことは無論であつて、彼の批判的にして獨立的なる方法論は、よしんばそれが彼自身に取つては正しい決勝點に達したものでなかつたにしても、他の多くの人々を正しく導くことは出来たと思ふ。

吾人は政治的思想家としてのマキヤベリの新思想を検討し、批判しやうとするものではないけれども、彼は彼自身に對する如く、彼の時代に對してもあまりに多くの彼の才智を使用し過ぎたと言ふことは明かなことであると思ふ。

文藝復興期の活氣ある智的生命が、歴史の地層の中に新しく脈を搏つたと言ふことは彼によつてであつた。尙ほ且つ彼は、たとひ彼が歴史的事實に對して嚴格なる推理を行ふことに於いて、又、單なる文學上の制度や、プラトニーによつて説かれた共和國の如き單なるユートピアを避けることに於いて、嚴正なる科學的態度を示したと言へども、彼の先輩としてアリストートルを有してゐたのであつた。時代が人を作ると言ふことは、ルーテルに於けると同じく、彼に取つても等しく眞實

である。彼の推理の主調は合理的であつて、理智を歴史に適用し、又、神學的學說から分離して觀察と反省とを政治的問題に使用することに於いて、マキヤベリは、ギツキアルデイニ Guicciardini とその時代の人々が、たとひ努力を缺き、而して非哲學的精神ではに反對せんとしたけれども、是に禍されることもなく、なさんと企てた方法論を實際的なものとしたのであつた。

ビラリ Villari はその著書 "Life and Time of Machiavelli," 『マキヤベリの生涯と時代』の中に、『人道學者の文學が古代の例に倣ふて、新しき智的訓練を生み、而して、純粹なる人間的及び自然的土臺の上に築かるゝ社會的事實の試練のために避く可からざる通路を作り出したと言ふことは疑ふ可からざる事實である。旅行に就ての彼等の手紙と彼等の著書は、種々なる國民の態度と制度とに就ての賞讃す可き記事を與へ、また、彼等の衰頹と彼等の再生との、その原因に對し有益なる註釋を下してゐる。吾人は最早や、巧みなる御者が、彼の激逸なる馬を御するが如く國民を御する神の

手の永久的説明には會しないであらう。何故ならば、その代りに、今やマキヤベリは人間の性質に於いて、人間の缺點と人間の徳性とに於いて彼が記しに事實の説明を見出すであらう。實に、この精神の新しき傾向は、政治的著者としての學者の純なる獨創的資格であると言ふべきであらう。』

三

マキヤベリが『この精神の新しき傾向』に對して大きな眼界を與へてゐたと言ふことは、彼の拔群の卓見を示してゐる。而して、彼は彼の同時代人達よりも因襲に對してより遙かなる反動を以て進んでゐたのであつて、國民性に就いての彼の辯護に於いても、又、法王權に對する彼の反對意見に於いても、又、封建制度に對する彼の敵愾心に於いても、彼は徹底的に近代人であつた。

彼は即ちその著“Discorsi”に於いて、『法王廳の忌はしき存在とその實例とによつてイタリアの國土は、すべての敬虔なる心とすべての宗教心と

をなくした。かくして吾等イタリア人は先づ吾等の信仰心の消失と邪惡心の増加の罪を教會と僧侶とに負はすべきである。若し然らずとしても、吾等は吾等の零落の原因であるその最大責任を彼等に課することは至當である。教會が吾等の國を分離して分居せしめてをることは事實である。而して如何なる國も、フランスや、スペインの國の如く、一共和政府或は一主權者の完全なる支配權の下に救はれて幸福に、若しくは、統合されることは出來ないのである。』と記してゐる。

この大膽なる意見から、吾人は中世紀に於ける思想と現代の思想との相違が如何に大であるかを知ることか出來るのである。封建制度も又イタリアの衰微を促した一大過誤であつたことに於いてその責任の一半を教會と共に分つべきであらう。それは國家統一と言ふことに對して氷炭相容れざるのみならず、共和的自由と平等、並に主權と言ふものに對して許さるべきものではないのであつた。是がために受けたイタリアの傷はローマニヤ Romagna ナポリ Naples ローマ及びロムバルデー

Lombardy の是等の小さな貴族達が、彼等の野心と腐敗とにそのなりゆきを委しておく限り癒ゆることはなかつた。歴史の研究に於ける彼の主なる實際的目的は如何にして彼がその退化を變化せしめ、統合された國家にまでイタリアを融合することが出来るかと言ふことにあつたほゞ彼の考へは近代的であつた。

この努力に於いて彼は同時代のフランスとスペインとによつて提供された統一の事實をイタリアに適用せんと欲したのであつた。然し、かくなすことに於いて彼は同時代に於けるイタリアのすべてのことながら思想とを排除しなければならなかつた。されど、この現代的精神は或る點に於いて、その主義を擁護するために不幸を招いたのであつた。

マキヤベリはこの時代の一般的低級な品性と宗教的精神とを反映してゐた。イタリアの政治家は純粹なる日和見主義者であつた。一定の主義を持って侃侃諤諤の言をなすものは殉教者のその如く稀であつた。たとへば、マキヤベリ自身の如き

も共和的主張を宣言してゐながら、然かも、再三の拒絶と慘忍なる苦惱とをうけたにかゝはず、フロレンス共和政府の破壊者によつて職を與へられんことを願つてゐた。他の場合ならば哲學者や、思想家の取る可き手段としては唾棄すべきものであるけれども、サン・カツシアノへの追放に於ける彼の絶望的困難は、追從的日和見主義であつたことも、或る程度までは許さなければならぬのであらう。

彼は疲勞しきつてゐた。悲壯な言葉を以て彼は友人ビトリノ *Vittorio* に貧困と苦しい闘争のために村夫子となつて、パンの代を得んがために村の子供達に文字を教ゆる以外何等の手段も方法もないと通じてゐる。かやうな絶望的な峠にある人を粗雑に批判することは不當であつて、殊に、彼が明かにイタリア人の希望としての共和國に於ける信念をなくしてをる時には尙更であると思ふ。

然し、表面上の主義の如何にかゝはず、卑劣な勘定高い精神はこの時代の特性の一つであつて、この精神はギツツキアルテイニイにも、又、

イタリアの諸王や、共和國によつて招聘された政治家のすべてに見られるのである。

四

既に述べてきたこの精神からイタリアの國家經綸策とマキヤベリの政治的科學とが生れたのであつた。而してそれは眞に人の心を引きつけ得る眞實なるものは含まれてゐなかつた。若し、この實際的な教育から一の制度が、世俗的であるのみならず、その形式の或るものに於いて、厚顔にも不徳義であることが展開されたとしても驚く必要はないのであらう。反動時代に於いて常に起るやうに神學から政治學を分離することに於いてマキヤベリはあまりに遙かに行き過ぎた觀がある。

彼は道德學から政治學を分離せんとした。然し、彼はイタリアのために熟考した國家の制度と政治とに於いて、政治學が神學のみならず倫理學からも、絶對に分離せらる可きであると言ふ彼の主義の無情なる論理を目覺ますために何等の餘地をも殘すことを許さなかつた。支配者は徳義に就いて

支配者自身の規定を有してゐる。この規定は國家が必要とする場合以外何等の法律にも服従すべきではなかつた。權力と術策とはこの支配者の缺くべからざる資格であつた。政治の才能は道理上本質的に不徳義なる技術であらねばならなかつた。それはその成功者としてルイ十一世や、スペインのフェルデナンドが教へた彼の時代の標準から考へたのであらう。

然しながら、彼は彼自身の時代を、古代の成功した政治家の尺度に従つて政治學をせばめることに於いて彼は科學的でも、又、人間性に對しても正當ではなかつたと思ふ。歴史的標準からみても、ルイ十一世の如き支配者の政治的技能が政治學の未知數を制定したと假想することが正しいことであつたか。或は、人間性が各時代を通じて根本的に惡であるかごうかを自から考究したものであるとは思はれない。若し、吾人が彼の水平線にまで歴史と人間性とをせばめるとすれば、尊き形式に於ける政治的生活の龜鑑であつた多くの事柄をこの世の中から奪ひ去つてしまふことになるであら

う。

マキヤベリの説くが如き國家の成立の不可能であることは事實である。政治學なるものに於いても粗雜なる實利的立場からはなれて神と良心との爲めに或る餘地を有さねばならぬ。宗教は政治的權力を離れて最善であり、良心は政治的博徒の勝負に於ける奥の手を例外として最善であるなど、言ふ單なる假定に於いて人を支配することは出来ないと思ふ。

道德學は道德學の立場を有し、而して時としては、人間生活のすべての關係に於いてもその立場を高唱して政治學をすら包括することがある。ドイツ、ネザーランド、フランス、スコットランド、イングランド等の歴史はマキヤベリがその意見を書きつゝあつたその世紀に於いても、マキヤベリ式の諸侯の驚嘆と時としては失望とに對して宗教的及び徳義的確信は國家の成立に於いて、又は、國家の互解に於いて恐ろしき力であることを明示してゐたと思ふ。

五

マキヤベリはキンキナツス *Cincinnatus* や、マルクス・レグルス *Marcus Regulus* の如き共和的ローマ人の偉大なる行爲を思ひ起さしむるが如き熱誠を以て世人の心に懃へんとした。キンキナツスとマルクス・レグルスとの祖國に對する愛國心と素朴なる心と剛直心と國への勤めに對する赤誠とは非國家的に賢明にして日和見的哲學者の良心の弦に鋭き責任觀念の強打を與へたものがあらう。かゝる健全なる國家の發達は稀に存する自由なる制度と民意尊重の政治にして斯くの如き人々の性格を生むことが出来るのである。

立君政體、一步進んで專制政體は最高の徳行を養ふことは出来ないであらう。專制政體はたゞ國民を再び統一するためか、或は、一國家を創設するため必要とする守備的のものである。否、それには必要缺く可からざるものであらう。即ち、非常時の手段としてである。政治の普通の形式としては完全なものではなく、寧ろ有害の結果を招

くであらう。何故ならば、若し、國家の創建者たる専制君主が、その人民のための政治を行はないならば、或は、多くの革命前のフランスの王がなしたが如く國民に少しの參政權をも與へないならば、國家の成り行きは不首尾である。ローマ人の國家に於ける執政官職の權力の如きものが、一時的であつて、正しく制限されたものであるならば必要であるかも知れぬ。無制限なる權力は常に有害である。

然るに "Discorsi" に表はれたるマキヤベリの思想は國家の創建者としての立法者には絶對權を附與せんとしてゐる。マキヤベリの思想による國家は機體以外に發達しないのである。而して國家の創立者としてのその資格に於いて立法者はすべての德義的法を超越してゐるのである。若し、國家の必要が、反對黨の虐殺の如き犯罪を必要とするならば、彼は無慈悲にも彼等を殺戮したであらう。彼は彼の目的を達するためには、それが不徳な行爲であつてもその行動に堪へねばならなかつた。是が全體としての善を包括する場合には少

數者の言論が正當だと認められても、そこには何等の力もなかつたのである。かくして、彼等の生命は何等の價値もないのであつた。

マキヤベリが吾人の前に提示した歴史の教訓に従へば、『ある可き筈のものがあるのではなくて、あるべきものがある』のであつた。即ち、未來によつて生きるのではなくて現在にのみよつて生きることをするのであつた。彼は恐る可きほど論理的であつたが、彼は、しかも、謎の人であつた。彼は何の顧慮もなく或る事實を破棄せんがために、その事實に關連する他の事實を承認した。彼の殘忍なる現實主義は吾人の心を寒からしむるものがあると同時に、彼自身が矛盾の苦境にあるの事實を見出すことが出来るのである。一例を擧ぐれば、國家の宗教制度或は平和確保の意見に於いて、壓制の殘忍なる主義を明言しながら、彼はその無制限なる權力が有害なることを認めてゐる。而して慎重なる調子で、自己一個の利益のために國家の利益を犠牲にする專斷家を罵倒してゐる。ローマの暴逆なる皇帝に關する彼の記事を引用して見

やう。

『ローマの暴逆なる皇帝はローマ市に火を放ち、
ヂュピターの殿堂は市民の手によつて破壊され、
舊き古代の伽藍は荒され、すべての儀式は腐敗し、
市街は姦夫によつて満たされ、皇帝は追放者を以
て蔽はれた海を見、血を以て汚された海岸を見た
であらう。ローマに於いて皇帝は無数の残忍なる
行爲を見、而して貴族、富豪、名望家、就中、德
望家は最も重き犯罪者として見做してゐたのであ
る。若し、彼が人間の子として生れたのであつた
ならば、恐ろしき時代のこの模倣を恐ろしく感じ
而して善良である事柄に倣はんと無限なる希望に
燃えたであらうに。』
と記してゐる。

六

吾人は彼の著書の隨所に今述べたが如き教訓か
らは全く正反對なる矛盾を見出すのである。倫理
學者は時として彼の所謂帝王なるものを想定せん
とし、又、彼の説く國家の目的を追求せんとして

眞に惡魔的なる政治的残忍心を以てマキヤベリに
擬せんとするのである。帝王はローマのネロの例
によつて惡事を愼むであらうと説きながら、同じ
筆の下にロムルスは彼の弟レムスとチタズ・タチ
ウス・サビヌスを殺したが故に、模範的政治家であ
つたと評を下してゐる。

政治に於いては、目的はその手段を正しくする
とマキヤベリは強辯せんとするのであらう。不幸
にも彼は彼の信念を正しいとする實例を中世及び
古代史に於いて多くを見出したのであるかもしれ
ぬ。然し、彼は少なくとも歴史なるものも、かく
の如き疑問に於ける決定的審判者でないと言ふ謎
によつてその事實の是認を制限せしめられたであ
らうと思ふ。

マキヤベリ式解釋に於ける歴史は誤りを生じ易
きものであらねばならぬ。彼は、『國家の安寧と言
ふことに關する絶對的問題である場合には、吾人
はそれが正か、不正か、慈悲か、残忍か、賞讃か、
恥辱かに就いて何等の考慮も許されぬ。然し、か
ゝる問題を始末した後の吾人は如何なる道が國家

の存立を安全にし、而して、その自由を保存するかに意を用ひなくてはならないのである。』と説いてゐる。

かゝる見地に立つてフランス史に現はれて来るパラチネート Palatine を焼いて焦土と化せしめたルーボア Louvois の行動は人類のすべてがその行動を非難しても、功績大なる政治家として讃へねばならぬのであらう。現代に於いてこの主義に基いて戦争をなさんとする人があるとすれば何んと評さるゝことであらう。吾人はマキヤベリの著書によつて歴史に含まれた教訓の或るものを的確に學ぶことが出来た。それらのものゝ中に於いて吾人は中世及び古代の未開なる方法論は後世に效力ある經世術の神聖なる標準でないことを學び得たのである。

共和主義に同情しながらマキヤベリは政治の共和的形式によつてイタリアを更生せしむることのすべての望みを明かになくしたのであつた。道義心の腐敗は、専制支配者の強き残忍なる腕によりて以外如何なるものも、このイタリアを有効に生

かすことは出来ないほど蔓延してゐたのであつた。敗徳の市に共和政を維持することは困難であり、それを再生せしむることは不可能である。スウィツルランドの如き國に於いて共和政體は最善の形式であつたかもしれぬ。而して、この國はアルプス山中に榮えた強き尙武的團結の賞讃には未だ染められてゐなかつた。而してその隣國の敗徳によつて惱まされ純樸さと自由さを保有してゐた。マキヤベリはイタリアに於いて實行されたが如き共和主義に對しての反動を表現したのであつて、事實の力によつて推し流されたやうに思はれた。

七

マキヤベリは革命を好まなかつたけれども彼の國家に對する改革の餘地を有してゐた。しかし、彼の改革は過去の狀態に復歸せんとするに限られてゐた。『是等の變革は國家をしてその國家の最初の主義にまで引き返さんとする有益なる改革である。』と明言してゐる。事實に於いて、彼はあまり

に過去に縛ばられてゐた。彼は大きな意味に於ける人民の政治的及び社會的解放に對しては何等の貢獻もしなかつた。この人民解放の問題は彼に對しては何等の暗示をも與へてゐたものとは思はれない。何故ならば、彼の國家は、それが共和主義であらうと専制主義であらうと、その何れであるにしても、たゞ近世の國家的形式の下に於ける共和的ローマか、或は、帝政的ローマかの復活に過ぎなかつたからである。彼はフランス或はスペインに於いて統合されたやうな政治的統一が出来れば満足したのであつた。然し、是が達せられても彼は古代の制度の上に近世的意味に於ける人民解放への漸進的誘導を試みはしなかつたであらう。

近代的眼界を以て世界を觀察するにはあまりに狭小すぎる古風であり、あまりに早熟的に生れてゐたやうに思はれる。事實、彼は進歩の理想を有せず、この點に關して彼の歴史の研究は特に何等の趣味もなく、而かも、一方に偏してゐたのであつた。彼は進歩をたゞ循環に於いて見たのであつ

て嘗つてあつたところのものが永久的に繰り返さるゝとのみ見たのであつた。

人は過去に存した。現在に存する。而して同じく未來にも存するであらう。かくして、マキャベリの歴史は決してこの事實、この歴史を越えて進まないであらう。過去は未來の尺度であり、そこには何の進歩もなく、變化するのみであつて、進化發展と言ふことは彼には知られなかつたのであつた。尙ほ且つ、人間は性善でなくして、ルートルや、カルヴインが主張しつゝあつたが如く、また、新しき神學說に於いて主張されんとしてをるが如く、本質的に惡であるとした。

マキャベリは歴史に於ける高尚なる生活へと人類を向上せしめた本質的善の過程を見逃したのであつた。この高尚なる生活に就いて彼は何ものをも知らなかつたやうに思はれる。彼は人間の多數の犠牲的赤誠によつて偉大なる結果を生じたそれらの偉大なる伸展には彼の眼を閉ぢてゐたやうであつた。彼のためには、この世を轉化し、而して高尚なる文化へと歩一步と導きゆく可き理想への

克己心と熱烈なる自己制御の福音とはなかつたのであつた。

彼は實にキリスト教徒が、この世に於いてなし來つたその跡を見逃しはしなかつたけれども、彼は異教徒の徳とキリスト教徒の徳とを比較するだけの興味を有さなかつた。それは確かに中世のキリスト教は世界に於ける更生的力として見做さるゝだけの力はなかつた。マキヤベリの時代に於けるすべての思想家がキリスト教には一顧も與へなかつた。ローマは第十五世紀のイタリヤに於いてすら怨嗟の府であつた。

人道は善の意味に於いても、又、惡の意味に於いても、何の展開もなさなかつた。その道は何等の勾配もなく、單なる平坦であつた。その道を古代の人が、踏んだが如く當代人も歩んだのであつた。かくして、進歩も、革命も過去によつて限られてゐた。若し、斯くの如きものであつたとすれば、異つた理由からではあるが、マキヤベリと共に人道の將來に對して失望すべきであつたであらう。

若し、古代の人が、民衆のために解放の極限に達してゐたとすれば、民衆はその失望のために充分なる理由を有したことであらう。然るに幸にも民衆はマキヤベリとは異つた歴史の解釋者を見出すことが出来る。

それは唯物史觀に生きたマキヤベリと時を同じくして唯心史觀にその生命の高調を叫んだイギリスのトーマス・モーアがあつた。このモーアに就いては稿を改めて他日書いてみたいと思ふ。(完)

朝 日 融 溪